

結 語

序章で掲げた本研究の目的に対し、筆者が現在までのところ至り得た知見は一応以上で述べ尽くした。本研究によって提示したかった方法や観点についてもそれなりに各個の問題の検討を通じて明らかになったかと思う。

日本語の活用体系の歴史の中で起こった大きな出来事（平安時代の活用体系の成立、終止形連体形合流、二段活用的一段化、音便形の成立）をそれぞれ別個な原理（文体の好み、他の活用形式への類推、発音のぞんざい化、等々）で個別に解釈するのではなく、一貫した原理と方向性に貫かれた一連の出来事として筆者なりの解釈を示すことができた。それぞれの時代における（いわば手持ちの）音韻を駆使して、活用語（とりわけ動詞）は、文法体系の内的変化（例えば自動・他動という文法概念の明確化、可能概念の明確化）を自らの形態上に実現していったのである。筆者はそれを〈活用の型の単純化〉と〈形態の示差性の実現〉という二つのキーワードを用いて説明した。

また、動詞以外の活用語の幾つかについても、それぞれの意味と形態の変化の過程に現れた興味深い問題を、形態音韻論的に論じ、活用体系全体の動きの中に位置付けることができた。特に、古代日本語と近代日本語とが大きく交替する境界期である中世後期に助動詞類が示す特異な形態変化を取り上げ、そこにどのような形態変化を促す“力”が働いているかを考えることによって、助動詞特有の活用の在り方及び形態変化に対する形態音韻論的解釈を示すことができた。

しかし、以上の一応の成果にもかかわらず、本研究は決して完成されたものとは言えず、論としての欠陥も少なくないことは自覚している。以下に、残された課題と今後の展望について簡単に触れたい。

本研究は、日本語の活用体系の歴史、ないし活用語の歴史として、細部に至るまで残るところ無き完璧な研究を目指したものではない。むしろ、全体の俯瞰の上に立って、最も根本的中心的な問題だけを取り上げ、活用体系の歴史が流れ行こうとしている方向を見定めることを旨とした。これは、細かな事例の採集に拘泥し、文献上の書記言語の姿にとらわれて、生きた言語変化のダイナミズムから乖離した変化の図式を描いてしまう素朴実証主義の立場からあえて離れようと意図したものである。そのため、実証的研究としては、かなり目の荒い、細部において粗雑な研究になってしまったかもしれない。今後は、本研究で触れられていない活用体系細部の歴史的変遷について、実証的に変遷の過程を追い、本研究で提示した活用体系変遷の方向にそれぞれの変化が沿うものかどうか、きめ細かな検討を重ねることが必要であろう。具体的なテーマとして、例えば、変格活用動詞の史的変遷を活用体系全体の歴史の中に位置付けるという魅力的なテーマが本研究では手付かずのまま残されてしまった。カ変・サ変がなぜその個性的な活用を保ち得たか、ナ変・ラ変はどのようにしてその個性を失っていったか、本研究で提起した〈活用の型の単純化〉と〈形態の示差性の実現〉という点からこれら変格活用動詞の歴史を評価する作業が必要で

ある。

また、本研究は形態音韻論的研究を標榜したものであるが、本研究における〈形態〉変化の検討は、まさにその語の“かたち”の変化にやや偏っていると反省される。その語の外形の変化に反映されるところの“意味”ないし“文法機能”の変遷をもっと重視する必要があるだろう。活用体系の変遷の向かう方向が、自動詞・他動詞の形態と概念が明確化する方向であったことを本研究で主張したが、この主張がより説得力を持つためには、一方で、自動・他動といった文法概念の史的展開そのものが究明されなければならない。古代のユ・ラユから現代のラ抜き言葉に至る〈語〉の盛衰を、可能・受動・自発等の〈文法概念〉の歴史の中に位置付けた小松1999aを一つの手本として、様々な文法概念の史的展開を活用体系の歴史の中に組み込んでいく作業が必要であり、またそのような研究は日本語の真の形態音韻論的研究として誠に興味深いものであるだろう。

〈活用体系の歴史の変遷を形態音韻論的な観点から記述する〉ということは、取りも直さず、音韻体系の歴史と文法体系の歴史とが活用語の形態と用法の上に斬り結んでいる様を描き出そうとする試みに他ならない。本研究でも、上代から平安時代にかけての変遷や活用形としての音便形の成立の問題等、音韻体系史と文法体系史の絡み合いに関わる問題を重視して取り上げてきたつもりである。しかし、音韻体系・文法体系それぞれの全体の動きと活用体系における個々の変化との関連のしかた、そのダイナミズムを充分に描き出すことに必ずしも成功していない。興味あるテーマながら論じ残している事柄も多い。例えば、いわゆる四つ仮名の混同と呼ばれる事象について、このような変化を許容したところの、ジ・ヂ、ズ・ヅそれぞれの音韻の機能負担の少なさが指摘されているが、二段活用の一段化もその機能負担を減少の方向に向かわせる変化であったこと。また、長音拍の成立が活用体系に何を齎らしたかについて（その極く一部の問題に第9章ウズ（ル）の検討の際触れた）の問題等。これら音韻体系と文法体系の相互の“干渉”の在り方について今後も検討を続けていきたい。

第IV部において中世後期の助動詞を例として助動詞の活用の史の変遷について論じた。助動詞には動詞と違った変化の要因があることについて、一応自説を述べることができた。しかし、その変化の要因を見出だす対象として取り上げた助動詞類が真に実証的な意味で正しく取り扱われているかは異論があるであろう。緻密な文献調査の積み上げによって今後是正されていくべき点も多いかと思う。また、そもそも中世以外の全時代を通じた助動詞類の変化に対する検討が継続されなければならない。助動詞類の担う文法概念の変遷を究明することの重要性は上にも述べたとおりである。

以上、残された課題は多いが、日本語活用体系の歴史に筆者なりに“見通しをつける”作業は一応のまとまりがついたものとして本研究を結ぶこととしたい。

(2000. 3. 31記)

参照文献一覧

*各章の章末にそれぞれの参照文献名を掲出したが、改めて著者別一覧（五十音順）としてまとめて以下に示す。

- 安達 隆一 (1972a) 「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について (一) —いわゆる原本との比較を通して—」 『解釈』 昭和47年2月
- (1972b) 「天草版平家物語の「ウ・ウズ・ウズル」について (二) —いわゆる原本との比較を通して—」 『解釈』 昭和47年8月
- 伊坂 淳一 (1987) 「く「つごもり (晦日)」のはなし」存疑」 昭和62年3月 『国語国文』 第56巻第3号
- 漆谷 広樹 (1995) 「中古・中世におけるムズラムについて—終止形ムズの用法—」 『専修国文』 56号 平成7年1月
- 大塚 光信 (1956) 「ウズとウズル」 『国語国文』 第25巻9号 昭和31年9月
- (1960) 「ベシとマイ」 『国語国文』 第29巻7号 昭和35年4月
- (1962) 「助動詞マイの成立について」 『国語学』 第50輯 昭和38年
- (1966) 「抄物とその助動詞三つ」 『国語国文』 第35巻5号 昭和41年5月
- (1986) 「シマウからシム」 『京都教育大学国文学会誌』 第21号 昭和61年
- (1995) 「鶏肋三題」 『梅花女子大学紀要』 第29号 平成7年
- (1996) 『抄物きりしたん資料私注』 清文堂出版 平成8年4月（上記大塚1960, 1962, 1986を再録）
- 大坪 併治 (1981) 『平安時代における訓点語の文法』 風間書房 昭和56年8月
- 大野 晋 (1953) 「日本語の動詞の活用形の起源について」 『国語と国文学』 第三〇巻6号 昭和28年6月
- (1955) 『万葉集大成6 言語篇』 平凡社 昭和30年5月
- (1978) 『日本語の文法を考える』 岩波新書 昭和53年7月
- (1982) 『仮名遣と上代語』 岩波書店 昭和57年2月
- 甲斐 睦朗 (1978) 「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について—その表現への志向—」 『国語国文』 第47巻8号 昭和53年8月
- 鎌倉 暄子 (1993) 「いわゆる推量の助動詞ムズ・ムズルとムトス—その本質と成立に関して—」 『鶴久教授退官記念国語学論集』 桜楓社 平成5年5月
- 亀井 孝 (1935) 「敬語「こしめす」について」 『国語と国文学』 第12巻 第11号 昭和10年11月 『亀井孝論文集4 日本語のすがたところ (二)』 (1985, 吉川弘文館) に所収
- (1980) 「《—キ (—) >—イ (—)》のいすとうりあ (ものがたり)」 『国語国文』 第49巻第1号 昭和55年1月 『亀井孝論文集3 日本語のす

- がたところ（一）」（1984, 吉川弘文館）に所収
- 川端 善明 (1997) 『活用の研究』増補再版（初版は1978・1979, 昭和53・54年）清文堂
平成9年4月
- 北原 保雄 (1967) 「形容詞のウ音便—その分布から成立の過程をさぐる—」『国語国文』
第36巻8号 昭和42年8月
- (1968) 「形容詞「ヒキシ」攷—形容動詞「ヒキナリ」の確認—」『国語国文』
第37巻5号 昭和43年5月
- 木之下正雄 (1958) 「形容詞イ音便化の条件」『国語国文』第27巻11号 昭和33年11月
- 京 健治 (1995) 「「ウズ」「ウズル」」『国語国文』64巻2号 平成7年2月
- 此島 正年 (1973) 『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社 昭和48年10月
- 小林 千草 (1987) 「近代語の文法—韻脚断断—」『国文法講座5 時代と文法—断断—』明治
書院 昭和62年6月
- 小松 英雄 (1975) 「音便機能考」『国語学』101集 昭和50年6月
- (1981) 『日本語の世界7 日本語の音韻』中央公論社 昭和56年1月
- (1999a) 『日本語はなぜ変化するか [断断としての日本語の断断]』笠間書院 平成11年1月
- (1999b) 「日本語進化のメカニズム—競への断断としての断断—」『国語学』196集
平成11年3月
- 酒井 憲二 (1957) 「天草本伊曾保物語の文章」『日本大学文学部研究年報』第7輯 昭
和32年3月
- 桜井 茂治 (1965) 「形容詞の活用形の成立について—とくにアクセント形態を中心とし
て—」『国学院雑誌』第66巻8号 昭和40年8月
- (1966 a) 桜井茂治「形容詞音便の一考察—源氏物語を中心として—」『立教
大学日本文学』第16号 昭和41年6月
- (1966 b) 「形容詞音便考—発生の要因—」『国学院雑誌』第67巻10号 昭和
41年10月
- 迫野 虔徳 (1990) 「「ウズ」について」九州大学文学部『文学研究』87輯（奥村三雄教
授・松田伊作教授退官記念特輯）平成2年3月
- 菅原 範夫 (1991) 「延慶本平家物語の「ムズ」小考」『鎌倉時代語研究』14 平成3年
10月
- (1992) 「「うず」の消滅過程」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書
院 平成4年3月
- 高松 政雄 (1993) 「音便—語結合点に於ける音節短縮としての—」『国語国文』第59巻
12号 平成5年12月
- 高見 三郎 (1990) 「『杜詩続翠抄』の「マジイ」「ベイ」」『女子大國文』107平成2
年6月
- 築島 裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会 昭和38年

3月

- (1969)『平安時代語新論』 東京大学出版会 昭和44年6月
- (1987)『平安時代の国語』(国語学叢書3) 東京堂出版 昭和62年4月
- 坪井 美樹 (1978)「国語資料としての三体詩幻雲抄・続考」『千葉大学教育学部研究紀要』第27巻第1部 昭和53年12月
- (1981)「形容動詞活用語尾と断定の助動詞—歴史的変遷における相違の考察—」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 昭和56年7月
- (1986)「助動詞の語形変化と活用形—中世を中心として—」『日本語と日本文学』第6号 昭和61年11月
- (1991)「終止形連体形統合と二段活用の一段化」『文芸言語研究』言語篇第19巻 平成3年3月
- 土井 忠生 (1934)『国語科学講座V 近古の国語』 明治書院 昭和9年4月
- 中出 惇 (1965)「天草本伊曾保物語における助動詞「ウ」と「ウズ」について」愛知大学『文学論叢』28 昭和40年
- 橋本 進吉 (1969)『助詞・助動詞の研究』 岩波書店 昭和44年11月
- 蜂谷 清人 (1971)「助動詞「う」「うず」「うずる」の語形・用法に関する一考察—語法を中心として—」『国語学』86集 昭和46年9月
- (1977)『狂言台本の国語学的研究』笠間書院 昭和52年12月(蜂谷1971を所収)
- 蜂矢 真郷 (1992)「多少と大小」『記紀万葉論叢』塙書房 平成4年5月
- 濱田 敦 (1986)『国語史の諸問題』和泉書院 昭和61年5月
- 林 史典 (1985)「何のために国語史を教えるか」『応用言語学講座1 日本語の教育』明治書院 昭和60年
- 福島 直恭 (1992)「サ行活用動詞の音便」学習院女子短期大学国語国文学会『国語国文学論集』第21号 平成4年3月
- 細川 英雄 (1979)「『天草版平家物語』における否定の表現形式と用法について(上)」『信州大学教育学部紀要』41 昭和54年
- 前田 富祺 (1985)『国語語彙史研究』明治書院 昭和60年
- 村上 昭子 (1979)「助動詞ラウ—中世末期の用法—」『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社 昭和54年2月
- 矢島 正浩 (1993a)「天草版平家物語における打消推量・打消意志の助動詞—難性との関わりを中心として—」『愛知教育大学研究報告』第42輯人文科学篇 平成5年2月
- (1993b)「天草版平家物語におけるマジイ・マイの用法」『国語国文学報』第51集 平成5年
- 山崎 馨 (1992)『形容詞助動詞の研究』(研究叢書107) 和泉書院 平成4年2月
- 柳田 征司 (1985)『室町時代の国語』東京堂出版 昭和60年9月

- (1993) 『動詞を起して 日本語音韻史』 武蔵野書院 平成5年6月
- 山内洋一郎 (1964) 「助動詞「うず」について—動詞の類として—」 『広島大学文学部紀要』 第23巻3号 昭和39年8月
- (1989) 『中世語論考』 清文堂 平成元年6月 (山内1964を所収)
- (1997) 「助動詞「うず」の終止・連体形について—中世における終止形の類—」 広島文教女子大学『文教国文学』第37号 平成9年
- 山口 佳紀 (1985) 『古代日本語文法の成立の研究』 有精堂 昭和60年1月
- 山田 潔 (1972) 「推量の助動詞「う」「うず」「うずる」の一考察—キリシタン資料における類—」 『学芸国語国文学』 昭和47年11月
- (1975) 「史記抄における助動詞「ウ」「ウズ」の考察」 『国学院雑誌』 昭和50年7月
- (1991) 「助動詞「ウズ」の表現性」 『国語国文』 60巻6号 平成3年6月
- (1998) 「『玉塵抄』の助動詞「ウズ」」 『学苑』 第694号 平成10年1月
- 湯沢幸吉郎 (1929a) 「足利期の敬語助動詞シモ・シムに就いて」 『国語と国文学』 昭和4年9月
- (1929b) 『室町時代言語の研究』 大岡山書店 昭和4年12月 (当初の書名は『室町時代の言語研究』。後に風間書房より現行書名で再刊)
- 吉田 金彦 (1962a) 「中古・近古における推量語「むず」・「むとす」の用法」 『国語と国文学』 第39巻3号 昭和37年3月
- (1962b) 「「むず」(んず)の成立」 『国語国文』 第31巻8号 昭和37年8月
- 吉野 忠 (1962) 「「おほかり」と「おほきなり」」 『日本文学研究』 第5号 昭和37年1月
- 渡辺 実 (1997) 『日本語史要説』 岩波書店 平成9年10月
- Günther Wenck (1959) 『Japanische Phonetik』 Otto Harrassowitz Wiesbaden
(辞典類)
- 『言語学大辞典』 1989.9. 三省堂出版 第2巻 世界言語編(中)
(引用した日本語史概説書類)
- 『国語史概説』 松村明編『国語史概説』 1972.5. 秀英出版
- 『新編国語史概説』 春日和男編『新編国語史概説』 1978.2 有精堂出版
- 『日本語史』 沖森卓也編『日本語史』 1989.3. 桜楓社
- 『日本語史要説』 渡辺実『日本語史要説』 1997.10. 岩波書店
- 『日本語の歴史』 山口明穂他『日本語の歴史』 1997.12. 東京大学出版会

* 本研究と既発表論文との関係

本研究各章の元となった既発表論文を次に掲げる。ただし、本研究執筆にあたって全ての既発表論文に手を入れており、考え自体を大きく変更した場合もある。筆者としては本研究を以て自らの考察の現段階とし、既発表論文はそれ自体先行研究の一つと考えている。その立場から本研究中に元となった既発表論文を参照文献として批判の対象とした場合もある。その場合は、既発表論文を参照文献としても掲げた。既発表論文の一部のみを本研究の元としたものは「(一部)」と表示した。

- 第1章 … 「終止形連体形統合と二段活用の一段化」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』19 言語篇 1991. 平成3年3月
- 第2章 … 「上代特殊仮名遣の消滅と活用体系」
『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂 1993. 平成5年7月
- 第3章 … 「平安時代における「命令形」の成立」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』23 言語篇 1993. 平成5年3月
- 第4章 … 「音脱落をめぐるって考える - 日本語史でのその役割 -」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』16 言語篇 1989. 平成元年8月
- 第5章 … 「活用形としての動詞音便形の成立」
『森野宗明教授退官記念論集 語・婢・齋齋』三省堂 1994. 平成6年10月
- 第6章 … 「形容詞の音便形」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』32 言語篇 1997. 平成9年10月
- 第7章 … 「古代官職名に見る接頭辞《オホ～・オホキ～・オホイ～》」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』28 言語篇 1995. 平成7年9月
- 第8章 … 「《大》と《多》 - 平安和文における〈オホカリ〉の使用について -」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』35 言語篇 1999. 平成11年3月
- 第9章 … 「ムズ(ル)からウズ(ル)へ - 終止法ウズは旧終止形の残存か? -」
筑波大学 文芸・言語学系紀要『文芸言語研究』36 言語篇 1999. 平成11年10月
- 第10章 … (一部) 「助動詞の語形変化と活用形 - 中世後期を中心として -」
筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第6号 1986. 昭和61年11月
- 第11章 … 「助動詞の語形変化と活用形 - 中世後期を中心として -」
筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第6号 1986. 昭和61年11月
(一部) 「国立国会図書館蔵本『玉塵抄』における「候」の諸形」
千葉大学教育学部研究紀要 第33巻第1部 1984. 昭和59年12月
- 第12章 … (一部) 「形容動詞活用語尾と断定の助動詞 - 歴史的変遷過程における相違の確認 -」
『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店 1981. 昭和56年7月